



薰箱錄

邊

信
775
31



門僧4
冊775
卷91

董稿錄卷之六

目錄

松前之事

南島志

甘藷記



萬籟錄卷之廿八

松前之事

中村直道輯

此二條奥村之斗物語



一松前之塚と福山之塚とヤル城下と子朝とヤル所と
東海一里とヤル

一城のりきつけめては石垣もさうと守もさうな

一城を代々志麻子と若狭守一代よりりりり中名宗と云は

一松方左衛門 因之孫 日次守 町井田伊成 下國忠

古家老也

一古く下玉をかり家分と云ふは是れ大徳寺長子孫を命に強しとて
をかり子息と云ふは松方との初分也和学の上も此等は
三十斗と云ふ也

一寺ハ禪浄云々目蓮一向宗各院寺の五宗のく者も云々云々

七日方

一 二河ハ松あり角ノ方ニ居ル古太ノ村也此松は上京より長ク
人烟是レ長キ所ニ在リ三万余ト或四万ト云々ハ其ノ村分ハ
古用ニ其ノ下名を以テシテ云ハル也

一 松ハ大森松多シ二葉ノ松ハ一カ方ニ在リ此松ハ松ノ候
ニ出ル所ナリ正月ニ門松ト云フ松也

一 松あり葉ハ少ク者ニ在リ一カ方ニ在リ此松ハ松ノ候
ハハナク大森小森ハ其ノ外ヤル者甚大松ハ一カ方ニ在リ水
系ナレ一麻ハ一カ方ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ
其ノ外ヤル者甚大松ハ一カ方ニ在リ水系ナレ一麻ハ一カ
方ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ
松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 津島岸ニ在リハ淡物ト云フ淡場より遠上ニ在リ此松ハ松ノ候
ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 米ノ久ヤシク松ありと云ハルハ一粒ト云フ也

一 大淡場地内ハ松あり此松ハ松ノ候ニ在リ

一 米ノ外野松田分多ク大野金ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 海内松あり此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ
此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 松あり淡海ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 松あり大森ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 松あり大森ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 松あり大森ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 松あり大森ニ在リ

一 松あり大森ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ此松ハ松ノ候ニ在リ

一 大森よりハ松あり此松ハ松ノ候ニ在リ

- 一 松方がうらふきめ家か一皆学問松方きさる一
- 一 松前と暗ハ一汁一菜さのほき青多一そ(せ)網のうらうは月
あさ(た)い(ま)い(の)多(か)一そ(と)中(上)方(ち)やん(漢)英(と)
る(し)海(英)し
- 一 松方あてま(ま)の(英)あ(く)と(ま)や(ち)方(折)の(英)さ(う)の(英)や(ま)じ
い(ま)れ(の)英(を)あ(く)川(き)と(ま)し
- 一 松方(ま)い(ま)用(色)や(ひ)ち(の)帷(子)ハ(英)さ(う)ん(松)に(寒)者(と)ぬ
- 一 故(ハ)五(六)月(毎)一(期)あり
- 一 犯罪(と)人(毎)年(あ)て(る)の(ま)か(く)年(も)を(ま)ふ
- 一 柳(の)葉(ハ)四(つ)つ(咲)か(ぬ)葉(出)常(御)在(信)し(時)分(沖)製(初)め(て)
か(ら)ば(人)の(つ)つ(り)し(い)ふ(お)月(の)柳(の)さ(う)り(を)
- 一 松(本)も(そ)ハ(柳)と(英)ハ(五)月(咲)ぬ

- 一 柳(花)の(香)日(中)一(と)う(一)な(な)り(い)さ(く)一(つ)一(を)守(ふ)方(と)る
- 一 松(方)女(節)一(う)ほ(と)も(多)有(と)る
- 一 松(方)と(あ)と(人)取(折)つ(と)い(ふ)言(と)同(様)な(ら)ば(高)生(同)様(と)い(ふ)言(と)も

松方と事

- 一 柳(葉)と(信)子(信)と(中)千(信)と(め)り(九)八(百)里(程)有(と)る(此)外
な(れ)と(れ)信(ら)う(と)信(ま)路(松)方(願)分(し)は(八)十(の)方(じ)
- 一 古(く)千(信)と(北)と(と)て(た)ソ(ウ)ヤ(ト)村(と)こ(ま)り(り)有(と)る(信)一
三(十)と(程)も(有)と(る)か(ら)大(意)解(し)難(不)と(る)も(は)有(と)る(太)信(と)る
年(中)より(松)方(と)い(ふ)下(に)お(ぬ)は(り)有(と)る(方)一(役)人(も)来(ら)う(り)の
ほ(う)い(ぬ)一(は)有(り)ぬ(と)い(ふ)と(る)と(る)と(る)事
- 一 此(度)や(し)信(方)信(地)か(て)蘇(勤)由(一)信(な)ま(れ)も(出)り(大)難(不)と
言(山)麓(も)ホ(め)と(ら)く(と)教(子)里(も)ホ(ら)合(お)ホ(さ)せ(事)一(有)

通海ハお成り有母なる事由

一 大く難く満別教と盛京と中絶け難く其の危を怖とす
松平ありていまんちうきまてしやは満別教の事なる

一 大くまんちうきまての上果ハ流の事凡これ子孫の故の由まてハ
四凡まてハ云々凡なる也

一 つまの佛も大くまんちうきまて大佛の内ハハコロノ毛又金の
ちりの秘ありて何れも甚ん厚く有るはこそ道ありて流をいづり

るこいれ流く辯ホも裏表とも小同流はねんかたつりあきん
厚ハ大佛を分れて何れもねんかたつりあきん

一 佛が有る地ハ獨子地とてまハあけまてまてこいれ辯ハこい
まてこいれ言氣ハまてまて言氣の色ハ辨法と名ハまてハ

一 佛ありてハ義經公よりまていあきんちうきまて

まて人対一云々まていあきんちうきまて末系このあきんちうきまて
あきんちうきまていあきんちうきまて

一 自分やとハ判官の末系あり流ハ秘流と名おたり人ハははは

一 物外一ハ自分持ハ日本入よりあきんちうきまて月夜ある也

一 ちハ中ちとセハ大流と名有るハ夫ハまてまての事いふこと大ハ
あり流の事いふことハ二月なり流ハ流の角をわけてあきんちうきまて

一 共ハ毒をわけてあきんちうきまて毒ハ一子のあきんちうきまて

一 志く流の大方ハ長子二万命もあきんちうきまて毒矢言射んてあきんち
力ハまてあきんちうきまて毒矢言射んてあきんち

一 ちハあきんちうきまて大肉食くも大く赤くあきんち

一 名を人海と名あきんちうきまてあきんちうきまてあきんち
まてあきんちうきまてあきんちうきまてあきんち

社にたまたま命をんでまてさるる一長凡雨ともはらり物あり

一 松のひびくのとて深澤りに切りし甲女共の日記し

一 十三枚と誓ひ難夫とてなをくくも十四枚と大言はるぞうて八枚
ふりて居るやとより後かき也

一 碧玉もうらふとくかお後か

一 三人の松系ありてはたふらんをその地とてあつはる松がより
不里に上まふりぬぬいとま(不)りぬる

一 切つほせいのちぞ地をたしやる松ありてもるはれやん高村
高おくらとる献上ありとてふりぬる世ふありとてせらとより

やと物ハトビとてものごありとてせらとよりぬれぬる

一 こそ乃然の味よく結に似たりよくとてたすど病くともいし

一 高ききとてはちぞねとてあも一とくは粘りたよりうら

系松あり一機ト一も同じとてさるる松ともヤリ松ともまが

りやん本よりぬ松とヤン九十月は葉落りてまた葉生

い本葉ふともいには少しも葉落りてあつりふりぬ

一 粟はたをめるる一をそ人の肉食とてし

一 正月の葉落りぬの上をて地松あり四不里粒約はる右よりと

中不三太川ありけりとしてある多くはれやんを介川とてし

かつてはれやんはれやん

一 名そのあはれハかりやとてはれやんをそふきやんを

一 名をたへ市儀やんをハきらひやありとてはれやんをそふきやんを

はくのおとれやん

一 名そ共へ人るとて密をるとしてはれくのいとれやんをそふきやんを

是ハ松が候より松禁制めてはれやんをそふきやんを

一 えんを名を依れ帝冠を垂てらハ大いなる水と云ふに祀
せられに吾せやんとう(とヤモと密通いし)て身ごころをせ
めやんをよめてもふりハハ陰陽師と云ふこと系りいヤマト
中ん志をまらる初やん(西王母)を祈らるる道中ん祈らるる道
りハはくくのぬとれやん

一 ちしひのナツトカ老ハ凡本を二尺余りに切り中ん右サハ七寸
程のものをつけり御みしてまて初やんを八日午に履くとく
のつくりあていすし太三なるハ二本もまらるる者くハ
一 名を共中常と云ふなりとやんとの老ハちしひの木の葉よ
てふみ柄の中ん外者くセサハ陰とちのいせん死久いをく
くり中んハ長サハ長文も或ふも者くハ
一 名を共凡ハ死するともかしめてしまらふとくしたる太死ん

けし用をくしムルり并々王正すとあもたまひひんひんけ
後さけ持初やんはもふらも死らるる太し纏ふ矢と二筋し
物りは毒ハ腸よ下死よ入さけやん

一 名を共く内と云ふ長サに夕子ツフとトノものまてち
一 名を後及く細工も多り持れ名をた有くはる

その他もまカし

亦海を契淵松竹を春念市安茶沙後光を珍重を道之に尚まき
馬書落早り如殺程明終初を珍難語中分て及此教如日
驚冗を依有本懐に次才出流ぬ不悔を松竹用汰
信有四月十有日下を殺程五月十六日三馬を流河日七方松竹
切立箱籠を紙中へ巻る老人を編述く東遊雜記を携込
途に勝槩松竹の凡物は技波を亮差を老人一迷眼
此柳店に如察を山水の表骨を平均中と感心不常只
夫方東夷地因り依系分五トモ海後れ七此地を去る辰也
當年重納リス老老の如て海湾を里ハシチヤウの活モ
口ランカと汗圓してウス経ナラヌニ元ウスハ山水を勝槩
りして頑石の位置清峯を踏回松竹並山家園のトモ東夷
地系のを一アブ又ハ平坦とソトと是よりヲシヤ三ハの海

若青石白炭區の内浦嶽大黒石の地を^{ホ一}連後六月二日
アフタお立ホロへツ江が海濱砂漠シラライのユウブツのムアワ
○サルのニイカヅグ○シフヲヤリ○シツイシ○ウラカワ○シヤマニ○と行て。
ホロイスミニカ^{シラハイカ}アリモトソ^{凡ハ目注}を海中一凡三層身と
突かざる出崎と^興私ハ多^銀昇^サシよりこのアリモと見て
来り東方地^凡土もこの傍の若^浮出^て一^変を^とく^ふシ^ニ
よりホロイスミ○ビロウも^有險^阻を^多ク^珍炭^能發^突凡[○]
して馬^足不^通を^有テ^シキ^ルイ[○]ト^モテ^クシ^ホシ^嶮蟻^附蟹
歩^法て^負腹^を先^進石^頭岩^灰を^躍寄^り形^象を^り水^中と
ゆ^て始^てと^ロフ^へ出^出ル^{より}亦^海濱^砂漠^し地^浪烟^衣と^活
砂^石面^を打^ヲホ^ツナイ[○]ト^ウブ^イ○シ^ヤク^ベツ[○]シ^タス^カ○コ^シブ^ムイ
○セ^ンホ^シと^行て^海と^接す^とニ^言ア^ツケ^シニ^至ル^{海陸}
海陸の有りとソトと
相友海と接す

此地淡泊を宜敷海面より大黒石より^廻私ハ^アク^モ傍^{より}
此傍と^言て^亦り^しソ^入江^ハ凡^三里^余奥^ハ湖^{あり}有^炭凡^三
二三里湖中小^崎石^十餘^社蟻^の聚^りて^傍あり^もの^奇勝^也
不^て云^はス^心来^古京^の事^一○ア^ツケ^シハ^古来^其中^の巨^壁手
と^唱へ^夫俗^も祇^正一^く人^物亦^不け^ル夫^俗の^事ハ^未誌^載也^也
詳^に記^すん^たハ^不贅^まなり^も其^地の^方ハ^夷人^の家^と唱^報也^也
と^多く^人物^も遅^敷ウ^ラカ^ワヨ^リ口^ハ夷^人大^根眉^毛あり^分是^也
歎^食取^不し^ル凡^三里^モヨ^リ奥^ハ眉^毛お^連り^て發^はる^勢凡^三里^方
一^切他^物と^不な^口帳^取の^方ハ^粟稗^大山^豆作^附古^行（粟^とモ^シビ
口^稗と^ビヤ^ハし^る）昔^義後^洲此^土（来^りぬ^ひ）所^播種^を放^ら
う^まる^也也^也（已^にサル^ツサ^台ワ^ホ義^後の^取居^とて^夷人

幣と云ふれ有るは六月廿三日アツケニおまじバセのヲツケニお経て
子モロエおる此地ハキイタツフ腹と唱へ北ハウナシリ橋東ハノウカ
マツプノお傍西ハメナシ黄言ニ東の
方とらふニシベツハシレトヨマテ凡
七百路子モロハ去子年曹細亞人伊世ニ漂民を送り後未だ
地も今程そのお傍あり有るは東方海上凡十七八里クナシリ
此此の周囲百里とふさふといふと谷山奇お実よ天造の妙先
やキとのつる小海中より溢る沸騰一タサリテトツ自然
方石巾凡六七寸長凡一丈半或一丈をとりおる事ととおま
て道の弟猪のこくその傍より甲形石有又その傍山上方石
長二三尺なるは井幹と組一凡六七有る平地は方石の山口阪
ト磨して是免甲のこく一奇く妙く石可云夷人の昔津縁
州此地は甲冑と云ふあり一化して石となりそ井幹ハ

然と高りふおましくは傳ふ不悔ハ孔明魚腹の南を陳石のこく
ハ旗旗を建りひり又六花板の階位と云試み込込くとも
おるまがくハシニマ紫黒角石を土灰に糝との象とをすは
二町ゆりろ名とし扇風のこくハ立並ハ海水とお扶して
如画ノヲタチウフと砂山を甚中穿て三尺かれハ砂ト岩
をりて是も義經の私化して砂となり由云傳ふヤヤヤ
スフリといふハ古三匹馬の古山絶頂ハ湖あり湖中ハ山
秀板して雲際ハ傳へ湖の水宿の如く流れて瀑布となり
シヤウチといふ東ハ流れて大川となりとラニ子ベツといふ
此山ナシより上ト口まをて一やして実ハ阿用才一の神也
ソノこは此お入りベツと施炭らウチノ沸湯の如き奇絶
其数ハ不悔クナシリ橋の八景と仰りて是も瑞穂の秋りおる

一切後河を渡りぬ山河の傍に事変て教州と物井くとも
人物を教州の介しえ發しきりて大に慨然と異なりアツシモ
そととん衣と割一亦ハ大慈は慈母と名はれ舞も多ク終
牝孺附し程と大なり遊戯戯れ居るよ夫母もその方人ホリ
毒氣とん射し不係と終せん宛一戸こりしし程の事とて
栗れ難者試み術と扱ハ一牌ハ八九尾と釣り鯉アブラゴカ
サの魚もこ魚して釣りゆかんまハ月廿六日メナシ腹のワケト
中布一物取九月十日アワケハ出上丹の角サレムカワロシコウ
ルハ^ル余一^ル教州の古蹟と訪ひぬサレノ川上ハヒラト
リハ^ル判官此山ハイトりる奥吻ときて 割カダヲ 辰と梅(まは)
ま^ルそとサハ判官ハ西大寺の女道節一ハ大慈怒て遊ハれ
セリと執り擢る一^ル此^ル山今^ルの平擢ハ其遠凡やと云

仰る所也とてそれ知り此方の夫人ハ凡俗家にも松およそく
イグれとて若中も稱せられ又月下ハ九十里余向の川上
ハキロイトりる山上ハ判官の末て奥と釣幣と建るハ知
て今程そが蹟あり又古申内志院の末も有りこの川上一ハ
十日初余も縮入先と人跡稀なりおと向のキロイト上ハ不傳
候て此以外夫人も余不中事とてより山内川上も中水
上踏涉りしは松をよとて大川沿水邊降り大木とせ氣
とて立あらし津り割也此中^ル松老の背も寢息とる如霜餘燠
とて^ル若中も希見え(賢海)松を凍り固り必凡三ハ松松
月眺水々香しく^ル松中^ル夫^ル月^ル去^ル平^ル三^ル公^ル城^ル年^ル三^ル月
ハ月ウスは後ヤム

一當^ル平^ル月^ル末^ル地^ルウス^ルハ^ル松^ルと^ル若^ル氣^ル水^ル秋^ルと^ル待^ルて^ル由^ルハ^ル奥^ル嶽^ル夫^ル地^ル(^ル進^ルミ^ル子

六羽不傷の如きを乞の若く一人も不了は四見四方の杜茂中懐
 玉飲蹴不磨の何み年と名を完備よ十月一日親の温法と欠の
 との今も志存不与公此一事かと志念而已ん許を人そ十年
 公希よもく定る此地は深くして方と事かして色と想像は
 自來竹亭亦おし法樂は補綴長所も沙如合り心は方
 別我小園を却返して一歴して遊覧してしん随分活版加養法保
 獲治長せよ成り耐えしん今一否相治不傷の曾年乃烟庭
 只の吾人山水の奇骨と洗滌してしん後事少く先記は承
 安平仁回契アノイヤ凡得九小窓の月州とめ乞は紅首

備中

古河古和軒老人

後報年記

近友守記

守重

六月廿七日

寛政十一未年也月廿七日西の備中へ書

又此六未年四月十九日守重記
 口方守重年
 中村直道

董菫録卷之廿八終

薰蕕錄卷之六九

南島志

目錄

地里第一

世系第二

官職第三

宮室第四

冠服第五

禮刑第六

中村直衛集

文藝第七
風俗第八
食貨第九
物產第十

南嶋志總序

流求國古來有聞焉始見於隋書曰大業元年海師何蠻等每春秋二時天晴風靜東望依稀似有烟霧之氣亦不知幾千里三年煬帝令羽騎尉朱寬入海求訪異俗何蠻言之遂與蠻但往因到流求國言不相通掠一人而還明年復令寬慰撫之流求不從寬取其布甲而還時倭國使求見之曰此夷邪久國人所用也

天朝史書不記其事然據彼所書則知其國既通于斯矣考諸國史曰

推古天皇二十四年掖玖人來南島朝獻蓋自此始
是歲實階大業十二年也曰邪久曰掖玖曰夜句曰
益久曰益救東方古音皆通此云掖玖階書以為邪
久即是流求也又曰
天武天皇二十一年秋所遣多祢島使人等貢多祢
國圖其國去京五十餘里居筑紫南嶋中所謂多祢
國亦是流求也當是之時南海諸島地名未詳故因
其路所由而名多祢島即路之所由而後隸大隅國
一作多禰唐書亦作多尼多祢國即南海諸島於後
總而祢之南島者是已

續日本紀
曰天武天
皇二十一年
七月辛未
多禰夜久
菴美度
感十人從
朝宰而末
貢方物授
位賜物各
有差其度
感島通中
國於是始
矣
又云
文武天皇
大業二年
八月丙申
薩多禰
隔化逆命
於是發兵
征討遂授
戶置吏焉

元明天皇和銅六年南海諸島咸皆內附至
孝謙天皇天平勝室後史闕不詳初
文武天皇大室中併掖玖島於多禰島置能滿益救
二郡以為大宰府所管三島之一及
仁明天皇天長初停多禰島以隸大隅國於是乎南
島貢獻蓋既絕矣而此間之俗亦祢之以為流求且
謂其俗啖人之國殊不知此昔時所謂南島也至後
又名曰鬼島則遂併流求之名而失之矣既而其國
祢藩中國且通市舶於我西鄙流求之名復聞於北
以迄于今按流求古南倭並見山海經而南倭復見

海外異記二書蓋皆後人所作雖然其書並出魏晉之際如其所傳亦既尚矣美嘗按東方輿地經短緜長限之以海莫有海內可以容南北倭者若彼流求蝦夷之地接我南北相去不遠蓋此其所謂者也且如後漢倭國列傳所載光武中元二年倭奴國奉貢朝賀以爲倭國之極南界也魏晉已前

天朝未有通中國者所謂我極南界即是古南倭也其傳併載夷洲澶洲而鮮卑傳亦有檀石槐東擊倭人國得千餘家之事焉吳志又曰大帝黃龜二年遣將軍衛溫諸葛直等率甲士萬人浮海求夷洲及亶

洲亶洲所在絕遠卒不得至但得夷洲數千人還是時亦莫有異邦之人來擾我边境者據西洋所刻萬國全圖本邦及流求蝦夷並在海中洲島之上或絕或連以爲東方一帶之地其地可以爲國者如彈丸黑子亦未有之也然則鮮卑所擊者古北倭後所謂蝦夷而吳人所至者亦是古南倭後所謂流求而已若彼二國方俗雖殊然方言頗與此俗同如其地名與此聞不異者往々在焉且夫後漢魏晉以來歷世史書並傳我莫而有與我不合者蓋與彼南北二倭相混而已矣世之人驟以爲其懸聞之訛非通論初

隋人名曰流求其所由未詳曰自義安浮海到高華
嶼又東行二日到鼉鼈嶼又一日便到流求義安即
今潮州高華嶼後俗謂之東即今台灣鼉鼈嶼即今
其國所謂惠平也島明人以謂熱壁山又謂紫壁山
古今方音之轉耳據此而觀之流求本是其國所稱
而隋人因之亦不可知也國人之說曰永萬中源爲
朝浮海順流求而得之因名流求明洪武中勅改今
字蓋不然也隋世既有流求名而元史亦作瑠求且
據野史爲朝始至鬼島其地生萑葦之大者因名曰
葦島明人又以謂於古爲流虬地畧萬濤蜿蜒若虬

浮水中因名後轉謂之流球

出世錄法

蓋亦不然也其國

未之前聞也隋人始至以爲流求且謂國無文字豈
有取虬浮水中之義也哉不強求其說可也其國凡
俗隋書所載最詳後之說者因而述焉明嘉靖中給
事中陳侃與行人高澄往封其國及還上使流求錄
二卷言從前諸書亦多傳訛乞下所錄史館詔從之
後人遂以陳氏之書爲得其實也前者宣永正德之
際中山來聘美每蒙

教旨得見其人未覽異言因知陳氏所駁未必盡得
之而從前諸書未必盡失之也蓋自隋至明歷十世

之間其國沿革彼有不同而君長之號國地山川之名與其風俗語言古今殊異豈能得無訛謬於其間哉雖然美嘗據國史考之於階及歷代之昏證以其國人言古之遺風餘俗猶存于今者亦不少矣乃紬繹舊聞以作南島志庶幾後之觀凡詢俗以有所考焉享保己亥十二月戊午源君美序

南嶋志卷上

地里第一

流球在西南海中依洲島爲國有國以來不知其代數云蓋古之時厥民各散洲島自有君長然莫能相壹迨乎中世始合而爲一未幾其地亦分爲中山々南山北之國既而中山遂併南北以迄于今三山分域亦皆未詳而今按其地圖校其計書曩者鼎立之勢畧可得而見矣因作地志

沖繩島即中山國也其地南北長東西狹而周廻方十六里七十四里是據此間里數而言凡六尺爲間六國頭十間爲町三十六町爲里後皆倣此

居北為首鳥尻居南為尾王府在西南曰首里蓋古
翠麗山地今作首里方音之轉也翠麗山見星槎勝賢地方一
里東西距海各二里許至于北岸二十九里去其南
岸五里凡諸島地山谿崎嶇罕有寬曠之野其人濱
山海而居各自有分界謂之間切間切者猶言郡縣
也王府領間切二十七曰因頭曰名護曰羽地曰今
飯仁舊作伊麻曰金武曰作鬼曰越來曰作讀谷
山曰具志河曰勝連曰作賀曰北谷曰中城曰作中
曰西原曰浦添曰作浦傍曰真和志曰豐見城
曰兼城曰喜屋武曰摩文仁曰真賀比曰作南

凡原曰鳥添大里曰佐敷曰知念曰玉城曰作玉曰
具志頭曰東風平曰鳥尻大里曰作鳥尾已海港
二所其在東北曰運天湊湊者水上人所會而此間
海船所泊也渾天湊曰作運天泊在今飯仁間切湊
泊七下間二町大船五六十隻可以泊在西南曰那霸
港去都城里餘此間及海外諸列船所輻湊也那霸
作那霸津港深二十二町間闊一町二十間堪泊大船
三十隻去長寄三百里去朝鮮四百里去塔加沙古
東南海面四百八十里云港口四邑居民蕃盛置那
塔加沙古即今台灣也
霸港官四負分治焉迎恩亭天使館亦在于此迎接
中國使人之所也

計羅摩島波作計明人稱謂鷄籠嶼即今鷄籠嶼見
若琉球國圖按皇明實記所載鷄籠淡去那霸港西
水一名東番非謂此島也其名偶同耳
行七里而至于此其周廻三里座間味島赤島隸焉
遼近小島凡八土壤狹少皆非有民居者座間味島
二十四町赤島周廻一里十八町去此西往先島
諸島云中國人稱馬齒山者即此
日先島認稱海中砂礁其國稱曰八重于瀨者南北五
里東西里半使琉球錄所謂古米山水急或由礁東
或由礁西而路均是七十五里而至于宮古島針孔之
濱也

戶無島

島在那霸港西北二十六里周廻一里六

町側近小島曰天來奈其地甚狹無人住者

久米嶋旧作九米島在那霸港及計羅摩嶋西周廻六里

二十町所屬間切二曰中城オホシロ曰具志河港二其南曰

兼城港港深一町濶五十間其東曰町屋入江其港

並皆去那霸港四十八里國史所謂球美見續

記明人以稱古米即此及見使琉球錄閩人三十六姓

之後所居也直北五里有鳥島隸焉即謂久米

島在戶無島北其周廻二里十二町去那霸

港西北三十里

伊惠島旧作泳島即明人所稱移山見使琉球錄及五

島相接而至今飯仁西北港口與波入江島去港口

約可二里其周迴四里七町

惠平屋島曰作惠階書作鼈嶼明人以謂欖壁山

或謂欖壁山書欖壁見使琉球錄及廣輿圖欖壁山者記

周迴二里十六町在今飯仁間切正北十里其南小

島名曰乃保即隸于此乃保島周迴二十三町

伊是那島島在惠平屋島南里餘周迴二里十八

町所隸二島其南曰具志河其北曰狝狝並皆狹小

非有居人者

鳥嶋島在惠平屋島東北五十餘里周迴二十四

町厥土產硫黃明人所謂硫黃山即此見使琉球錄

等書以上九島古中山之地

興論島曰作興明人稱繇奴島在沖繩島東北而其

北接永良部島繇奴周迴三里五町所屬村二曰武

幾也曰阿賀阿賀仇其港曰阿賀仇泊泊即謂可泊船之

所也去自運天湊東北行二十里而至于此港口淺

未易出入

永良部島曰作惠在興論島北接德島明人稱野刺

普即此見輿圖永良部名永良部者凡三隸大隅國謂

未詳周迴十里十八町所屬間切三曰木比留木比留大城

曰德時其港曰大和泊去自與論島東北行十三里而至于此港深二町二十間大船未易出入

德島九島曰作度國史所謂度威島見續紀在永茂部島

北而其東北接大島周廻十七里三町所屬間切三

曰東曰西曰面繩港三其東曰秋德港港深一町

三隻大船去自永茂部島東北行十八里而至于此其西

曰大和尔也泊其北曰井之川西北二港並皆淺狹

大船未易出入

大島 嶋在德島東北十八里琉球北界也通文獻

謂琉球北國史所謂阿麻弥島或作奄美或作奄美

並皆謂此阿麻弥者上世神人名也其東北有山乃

神人所降因名曰阿麻弥嶽島亦因得此名地形稍

大後稱以為大島其周廻五十九里十町所屬間切

七曰笠利曰奈瀨曰古見曰住用曰東曰西曰燒内

港八曰西古見湊曰燒内湊曰大和馬場湊曰奈瀨

港曰深井浦曰世徒多浦曰瀨名浦曰住用湊西古

港五十間湊三十間可泊大船五六隻此去到于德

島有兩路其一正南行十八里可以抵大和泊燒内湊

港西南行十八里可以抵大和泊燒内湊在其東

大和馬場湊港深五町可泊大船其東七里即

其東五里即奈瀨湊港深二町可泊大船其東七里即

十四町可泊大船其東三町即深三町可泊大船其東三町

十四町可泊大船其東三町即深三町可泊大船其東三町

馬成云
際可作際

畧淺狹不可泊船其南即瀨名浦亦不可泊船其西
南四里半即住用湊港深三町濶二町可泊大船七
八隻自此南去而轉西北去自深井浦西北行三十
抵西古見湊約三十里北去自深井浦西北行三十
五里至于七島隸薩摩國使琉球錄及圖書所謂七島
此島即其海潮常向東而落乃是元史所謂落際水趨
下而不回者也諸島相離中間所謂落際者往往在
焉使琉球錄以為落際不知所在死又去此北行七
十里至于大隅國永良部島俗謂之阿麻弥洲之渡
蓋古遺言也所隸三島曰加計奈五周廻曰干計四周廻
九曰興路二周廻三里並皆在大島之南
鬼叟島 島在大寫東南七里自世徒多浦東南行
七里至鬼叟島梳泊

周廻六里二十四町所屬間切五曰志戶トツケ曰東曰
西目曰梳曰荒木其港在西曰梳泊乃是明人所稱
吉佳見圖琉球東北極界也蓋國人云小琉球以上五
寫古山北之地
宮古島 寫即明人所謂太平山也見廣輿圖梅星
有太奇山島夷志云大奇山極高峻夜半登之在計
望賜谷日出紅光燭天山頂為之俱明或此在計
羅摩嶋西南七十五里周廻十一里所屬間切四曰
於呂加曰下地曰平良曰雁此島無所所隸六島
曰以計末一周廻曰久禮末一周廻曰永良部即良部
島周廻四曰下地周廻曰太良末四周廻曰美徒奈周
里二十町曰下地周廻曰太良末四周廻曰美徒奈周

一 去此西南行五十二里至八重山其海潮亦常向
東而落乃所謂落際者 去宮古島針孔濱向西行
三十五里至太良滿島又去
西至石垣島 平
窟寄十八里

八重山島 石垣入表二島之地總稱以為八重山

國史稱信覺 見統日 星槎勝覽稱重曼山蓋皆謂此

石垣乃是信覺之轉耳石垣島周迴十六里十七町

所屬間切四曰河平曰宮良曰大濱曰石垣其港二

在西北曰河平港 去宮古島針孔濱五十八里半港
深六町三十間濶一町大抵二三

十隻可在南曰御崎泊港口淺狹不可泊船唯其西

南津耳堂計止美島黑島波照間島等隸焉 堂計止
美島在

並

御崎泊西一里二十八町周迴一里三十町黑島在

堂計止美島西南二里二十町周迴二里二十町其

所管二島曰上離島周迴二十町曰下離島周迴二

十七町其在黑島西南波照間島周迴三里二十町

去是琉球南界也入表寫在石垣島之西南石垣島

乃茂登嶽此寫在彼山之南故名曰伊利於茂登島

於言九深奧之所謂之伊利伊利即入也表者於茂

登之語 周迴十五里所屬間切二曰古見曰入表亦

記耳 有小濱鳩間內離外離等而隸焉 小濱在堂計止美
西二里其周迴三

里小濱之北有宇也未島狹而無人住者鳩間島在

入表西北海上二里半內外離島在入表西南海灣

三島皆狹小去此以西路過落際而行四十八里至

非有民居者 興那國其地周迴五里十町乃是琉球西界也 興那
國亦

隸入表 以上二寫古山南之地

世系第二

琉球古南島也流求之名始見隋書曰王姓歡斯氏不知其由來有國代數也按諸國史及中山續世系等書蓋非其國自古有王而其由來代數不可得而知也未始有王其國可以紀其由來代數者也國在海中洲嶼之上或絕或連壤地不接諸島各有君長而莫能相一階書以謂其國有王又有小王乃據其君長所統地有小大而而言也隋書王及小王猶言唐書曰邪古波據國史南島朝貢多尼三小王乃謂諸島酋帥也

者凡以十數而授其位賜其祿各有差亦以其所統大小各有差等之故耳階書以歡斯為王姓者非也歡斯即其君長之稱後稱曰按司曰王子皆是古遺言也自有王以來代數歷年可得而記者以序其略云

鴻荒之世有二神而降于炎海之洲一男一女因生三子其一為君長之始其二為女祝之始其三為民庶之始邃古洞遠歷世綿邈國無史書厥詳莫聞長慶間僧袋中南遊輯錄異聞其畧如此中山世系圖序云大荒之世有一男一女因生三男二女長男為君王之始號曰天孫氏中男為按司之始少男為蒼生之始長女為女君之始少女為內侍之始天孫氏世

傳統一乃八百余年其代不詳二說出於其國所傳而本無所稽雖然袋中所聞考諸國史及隋書或庶幾焉今始從此君長乃按司也女祝乃女君也其書又速上世之事且記二神之名其男之子リキ工其女曰尸々シキ工他皆及
荒唐之言不足徵也

推古天皇十五年遣小野妹子購書海內聘于隋是歲煬帝大業三年遣羽騎尉朱寬等入海求訪異俗因到流求言不相通掠一人而還明年復令寬慰撫之國人不從寬取其布甲而還時我使者至見之以爲此夷邪久國人所用也隋遣武賁即將陳稜朝請大夫張鎮抄率兵浮海擊之虜其男女數千人載軍實而還國遂與隋絕其後六年而掖玖人來朝

玖掖

即邪久也是歲春秋之間相繼而至者凡三十人皆未及還而死後十五年掖玖人來朝是歲

欽明天皇三年也後四十六年多称島人來朝是歲

天武天皇六年也八年冬遣倭馬飼造連上村主光

欠等使多称島十年秋連等率多称國人來献其地

圖多称島多称國義見總序日本書紀云其國去京

藝而收土乞交子莞十一年多称掖玖阿麻弥人等

朝貢賜祿各有差多称掖玖後隸大隅國唐書以詔

詳見後十三年遣文忌寸博士譯語諸田等使多称

國其後三年文忌寸博士等八人率兵以至南島慰

撫之明年多称夜久菴美度惑人等菴美即阿麻弥度惑即今德島

隋博士等來献方物授位賜祿各有差是歲

文武天皇三年也後三年薩摩多称人等方命南路

隔絕乃發兵代而平之遂按戶置吏是歲大室二年

也其後五年詔大宰府授位賜祿於南島又各有差

是歲慶雲四年也後六年南島菴美信覺琉美等五

十二人隨太朝臣遠建治來献方物是歲

元明天皇和銅六年也菴美即菴信覺即今八重山琉美即今久米島後七

年授位南島凡二百三十二人各有差是歲

元正天皇養老四年也後七年南島人百三十二人

宋朝叙位有差是歲

聖武天皇神龜四年也後七年太宰大貳小野朝臣

老遣高階連牛養植牌南島以誌所在地名里數及

泊船取水等處是歲天平七年也後十九年詔令大

宰府重修南島之牌是歲

孝謙天皇天平勝室六年也自是之後史闕不詳按

喜式太宰府別頁有南島方物蓋養老天平後四百

間以南島隸大宰府故史亦畧不尽舉而已四

源朝臣義家孫廷尉為義子為朝竄伊豆州及平氏

擅權朝政日衰常憤々欲復祖業因浮海上畧諸島

之地遂至南島為朝為人魁岸絕力援臂善射南島
人皆以為神莫不服者乃狗其地而遷居未幾官兵
襲攻之竟自殺有遺孤在南中毋大里按司妹育于
毋氏幼而岐疑有乃父之風及長眾推為浦漆按司
方是時諸島兵起戰鬪不息按司年二十二乃率其
眾一匡靖亂奉國尊稱以為舜天王是已歲文治
三年也宋淳熙十四年也亥出中山世系國序保
十八而南島明年舜天生是歲仁安元年也嘉應
二年夏為朝自殺年三十三大里浦漆並是中山地
名○東鑑云文治四年夏五月費賀井島降先是源
賴朝欲擊貴賀井島眾諫之乃已歲春三月鎮西
人藤信房獻島地及海路圖且請擊之遂命西海鎮
將藤遠景及信房等率兵擊之島人乃降按貴賀井

蓋鬼眾也其事適當舜天為王之初在位五十年以
而東鑑所載止此不得其詳以俟後考
嘉禎三年卒享年七十二宋嘉熙元年○宋史流球
有海島曰澎湖烟火相望淳熙間久酋豪掌率數百
軍又閉戶則免但刑其門圖而去擲以匙箭則順拾
之鍊騎則爭剗其甲駢首就戮而不知悔臨歛用標
繫縛十餘犬為操縱蓋惜其鍊不恣棄也不罵舟楫
惟縛竹為筏急則群昇之地我而適按流球去澎湖
五百里豈是烟火相望之地其喜鍊器縛竹為筏皆
制非其堅厚則不可涉矣且其喜鍊器縛竹為筏皆
是巴且之俗其國亦去澎湖不甚相遠蓋宋人謬長
謬之言耳雖然其事亦當舜天之世因附于此
子舜馬順熙嗣立即位十一年享年六十四以寶治
二年卒宋淳祐八年也長子義本嗣在位十一年而歲荒荐
饑疫疾並行國有稱天孫氏者民皆飯之義本因遜

位焉時年五十一是歲弘長二年也宋景定三年英祖天
 孫氏之後受讓當國開地始廣出世續圖按世系圖
 天孫氏之後數字蓋彼人不欲告我以舜天氏絕統
 耳又執世續圖以為英祖當國開地始廣則知先世
 未有統一之主也明矣力世系圖所謂初階兵來犯
 天孫氏世為王其國者果其非實也
 歷唐五代宋元數世不與中國通及元至元二十八
 年世宗遣海船萬戶楊祥福建人吳忠斗等捧詔而
 詔曰朕收撫江南已十七年海內諸蕃罔不臣屬惟
 流水密迹閩境未曾會皈附議者請即加兵朕惟祖
 宗立法凡不庭之國先遣使招降來則安堵如故否
 則必致証討今命使宣諭汝國果能慕義來朝存尔

國統保尔黎民若不知順自恃險阻舟師奄及恐貽
 後悔尔其慎擇之明年三月祥至其國先令軍官劉
 因二百人以小舟載軍器領三嶼人陣輝者登岸國
 人不解三嶼人語為其殺死者三人遂不將其命而
 還成宗元貞三年徵遺福建省都鎮撫張浩新軍萬
 戶張進赴其國禽生口百三十人後三年英祖卒在
 位四十年享年七十二是年正安二年也元大德子
 大成嗣世續圖作大成在位九年以延慶元年卒年六十三
 元至大其次子英慈嗣在位五年以正和二年卒享
 年四十六元皇慶二年其第四子玉城嗣不德國亂山南

山北分而為三玉城據于中山二十三年以延元元
年卒享年四十一以元後至元二年○美間甲午使人
以南之地稱山南山南王在大里城美竊疑之蓋未
講究而臆斷以置對而已三山割據壤地雖小各自
立國百有餘年乃就一島南北之地而皆極乎海其
其地固冲繩島地南北稍長東西甚狹皆極乎海其
周迴僅七十四里若如其言今飯仁以北屬于山北
大里以南屬于山南則中山地南北以三山燭國耳
使先島以南屬于山南則中山地南北以三山燭國耳
橫乎其間足食分幾何可以為三等其一則冲繩及
西計帳凡諸島地分隸以三其判然分矣其歲租亦
所因古三山疆城而鼎足之勢判然分矣其歲租亦
國之用也軍長子西威嗣在位十三年卒享年二十
三是歲負和五年也元至正中山王察度立察度者

故浦添按司之子世讚國云王城長子西威在位十
不知所自始其父為浦添按司○系圖云西威在
位十三年元至正十年卒年二十三又加一圖於察
度上以分其統耳蓋世讚國據其實而言然察度之
立其故不詳始舜天以浦添按司者蓋其苗裔乎而
今不可是時元既亡明主即位洪武五年其行人
得而考齋詔往諭其國中山王察度山南王承察度山
揚載齋詔往諭其國中山王察度山南王承察度山
北王怕尼芝皆遣使朝貢十五年賜中山王山南王
鍍金銀印文綺使還言三王爭權相攻十六年賜山
北王如中山山南之例因詔令罷兵息民始自
文武天皇授位南島人等六百八十餘年於此而三
王受封於外國焉三王受封蓋此二十一年明以所

所獲元主次子地你奴瓮居琉球二十五年中山王
遣其子侄及陪臣子弟入大學明主禮遇獨優賜函
人三十六姓善操舟者令往來朝貢二十八年中山
王察度卒享年七十五在位九四十六年世讚國世
系國皆云
察度元至正十年即王位在位四十六年而明人諸
書以中山王察度永樂二年卒蓋誤以山南王承察
度為中山世子武寧嗣永樂二年山南王承察度卒
王察度也王察度也世子武寧嗣永樂二年山南王承察度卒
無子令從弟注應祖攝國事應祖遣使請命乃賜冠
服嗣山南王山南王承察度或作承察非或
以注應祖為承察度弟亦非三年中
山王武寧卒在位十年世系國云尚思紹嗣
享年不詳尚思紹嗣云察度
卒子尚思紹嗣自是以尚為姓而其所以尚思紹上二書並皆可疑
止此世系圖又加一國於尚思紹上二書並皆可疑

據國書永樂中思紹所獻表有臣祖察度之語又皇
明世法祿云察度世子武寧嗣武卒子思紹嗣由是
觀之世讚國誤脫武寧一世不可疑也世系圖加國
於思紹上蓋其以尚為氏之始故乎柳亦尚思紹以
武寧兄弟之子入後考其在位十六年以永樂十九年
統乎姑存疑以侯後考其在位十六年以永樂十九年
卒世系圖云享年不詳因書以為
宣德初思尚卒世系圖不合世子尚巴志立請
封宣德三年勅內監柴山徑封巴志嗣王是後遣使
冊封以為故事巴志賢而施仁眾皆悅服山南山北
遂飯干一笑統文獻通考及國書以
思達遣人朝貢未幾山南山北為景泰元年尚
所并世法錄以為景泰五年尚泰久嗣先是山南山
注應祖為其兄達勃期所弑尋與山北併於中山
中所錄亦謂尚泰久之所錄蓋謂尚金福平後國亂尚
之言不合惟其袋中所錄蓋謂尚金福平後國亂尚
秦久嗣封以在位十八年以正德四年卒享年六十
定其亂而已

八初三山稱藩朝貢不時至中山併南北遂令二年
一貢每船百人不過百五十人即福建南臺外置
番使官即今流使至館教誨入京師中山朝貢統文
三山每二年朝貢一次至尚思達時南北俱為所併
遂今三年一貢尚書以爲思達時令三年一貢世法
錄以爲成化七年尚四嗣十一年貢使還至國恣殺
掠詔著令間歲一貢諸說頗有異同按大明會典云
祖訓琉球朝貢不時國有三王後惟中山王至諭
令二年一貢蓋得之矣因係之巴志以俟後考世
子忠嗣在位五年以正統九年卒享年五十四世子
尚思達嗣在位五年以正統十四年卒享年四十二
尚忠第尚金福嗣在位四年以景泰四年卒享年五
十四第布里與子志魯爭立國亂失其印綬次第尚

泰久馳奏命給泰久印嗣王景泰五年泰久嗣封克
定四方在位七年以天順四年卒享年四十六子小
德嗣以成化五年卒享年二十九在位九年尚圓嗣
在位七年以成化十二年卒年六十二世系圖又加
因考世法錄云尚德嗣父泰久立卒子尚四嗣梅世
子也泰久卒時四十六歲子尚德嗣在位九年二十
系固泰久卒時四十六歲子尚德嗣在位九年二十
九歲卒尚四嗣在位七年六十二歲卒然則尚四與
尚泰久同長於尚德二十六年是非爲泰久之子者
而況爲德之子者也乎尚德是非爲泰久之子者
寫而已初忠世子思達卒忠弟金福卒布里與金
福而志魯爭立明王金福次弟泰久嗣王泰久
卒而無子國人立思達弟圓以爲其君故曰泰久
丘傳至尚四又曰尚四者尚忠之仲也雖然世系圖
略而不詳姑存其疑以俟後考又按閩書及世法
錄以爲尚四成化十五年卒亦誤五當作二年世

子尚宣威立六月而卒國書以宣威為尚德之子長子者非仲子尚真

嗣在位十年以嘉靖五年卒享年六十二世子尚清

嗣在位二十九年以嘉靖三十四年卒享年五十九

世子尚元嗣是歲嘉靖三十五年夏海寇徐海敗于

浙直有逃入琉球者尚元發兵邀擊殲焉得所掠金

押等六人遣使送皈時王直徐海等亡命海島之中

人号曰倭寇賜勅獎諭厚賚金幣隆慶六年尚元卒享年

四十五在位十七年世子尚永嗣在位十六年以萬

曆十六年卒世系圖云世子尚寧立時閔白平秀吉

命薩廣州徵貢於中山萬曆十八年春尚寧遣僧天

龍桃菴等來聘見統文獻通考且其以為莫在萬曆二十年者非兩朝平攘錄以為萬

曆十七年夏蓋得之矣中山使人以慶長十八年春至于此即是萬曆十八年也明年閔

白大徵諸州兵欲道朝鮮入于燕京是年夏尚寧遣

使請封其相鄭禮密以閔白情由報聞明年春閔白

遂發兵入犯朝鮮明主令其使者自齎詔皈冊封使

能勿遣歷十餘年朝鮮師解尚寧堅請如故莫明主

嘉其為不叛之臣乃命兵科給莫中夏子陽行人王

一禎往封焉初中山與薩廣州世有隣好比歲以來

二國交惡使余遂絕州守源朝臣家久以告我神

祖乃發兵擊之前鋒進取北山之地斬首百餘級水

陸敷行並入那霸港中山之兵連戰皆敗王城遂陷
尚寧出降師起四十餘日宗社失守矣明年秋八月
家久率尚寧及王親陪臣等來 神祖乃命王尚寧
使皈其國以附庸於薩廣州善繼前好敬承先祀於
是則古南島地復舊域矣及二國兵端略見南浦文集
始自三山稱藩中國乃至此九二百年明年尚寧得還乃遣使修貢於
中國以報中山王業已皈國且欲代我以請互市是
歲明萬曆四十年也海道參政右崑玉等驗貢物雜
我產請阻回俟執定中丞丁繼嗣直指陸爰祖因具
疏謂緩外貢脩我內備明主從之令貢使無入朝量

收方物給賞出函書及皇明世法錄等案皇明三大
王声取鷄籠淡水侵閩廣皇明實記又云萬曆四十
年十一月將明檄琉球貢海上福建巡撫丁繼嗣
葵言倭將寄書其家暗指入犯之期其檄與書語多狂
悖倭軍門也其書見南浦文集郭國安人尚寧遺書
福建軍門也其書見南浦文集郭國安人尚寧遺書
廣所謂人稱鷄籠淡山水備閩廣也世法錄云萬曆
四十四年五月鷄籠山王尚寧遣通吏蔡慶執倭所
艦五百餘艘取鷄籠山島野夷並是三大征考所
丙辰倭犯南麂外洋閩來告急已而寂然已即非
我實有此也美嘗聞薩州人量收方物又使十年
一貢事皆命代我請互市明人量收方物又使十年
故事乃聽五年一貢厥後尚寧在位凡三十二年以
亦請不已久之後舊云 尚寧在位凡三十二年以
元和六年平享年五十七是歲明泰昌元年也世子

尚 嗣在位二十年以寬永十七年卒享年五十一
是歲明崇禎十三年也世子尚賢嗣當是之時明既
亡韃靼入中國建號曰清紀元曰順治三年閏平明
年清主遣使招撫琉球是歲正保四年尚賢卒在位
七年享年二十二尚質嗣按世系圖賢二十二歲卒
時質年十九質非賢之子
未開後六年清主復遣使繳納前朝所賜印綬尚質
乃遣使賡送因請其封是時海寇縱橫路梗不通清
主既殂太子即位改元康熙康熙二年遣使冊封如
前朝故事尚質遣使表謝明年復奉表賀即位五年
如勅以兩年一貢為例尚質在位凡二十一年以寬

文八年卒享年四十是歲康熙七年也世子尚貞嗣
在位四十一年以室永六年卒享年六十五是歲康
熙四十八年也世子先卒適孫尚益嗣在位四年以
正德三年卒享年三十五是歲康熙五十二年也世
子尚敬嗣年甫十五始自中山稱藩於中國凡王卒
則世子赴告以請襲封冊封使至則先祭前王於寢
廟寢廟在國門外唯有諭祭而無贈謚故歷世未得
有謚云

官職第三

古時流求諸島地各有君長若隋書所謂王小王

鳥了師因其所統大小而所稱亦不同至其諸島君長咸皆內附

天朝授位亦各有差天平勝室後史闕不詳厥後六百三十餘年中山山南山北皆稱藩中國受其封爵王妃王姪國相塞官亦各賜冠服乃是中山品官制所由起也其武職名始見嘉靖使琉球錄蓋所謂奉正朔設官職被服冠裳夷習稍變有華風者也因錄所開略記官名焉

按司正二品正從各九品正一品則王子從一品則按司正二品則三司官親方從二品則親方三品至

七品則親雲上正從八品則里之子正從九品則統登之皆是國中所以稱也王子官號也王之同姓及異姓凡有分封者皆稱其地王子雖曰王子弟亦未嘗封者不得稱王子按司猶言郡侯也王子之子有分封者稱某地按司至尚巴志始并三山各地按司皆賜第宅不得就其封焉三司者天曹司地曹司人曹司各一員猶漢三公即所謂國相也親方者尊親之稱凡任其官者皆附宗籍親雲上親近也雲上殿上也猶言堂上官也俗稱親雲上曰牌古米或曰牌金其義不詳里之子本為邑宰之子者任此官即今非

其人亦仕之筑登之義亦不詳云出于庚寅甲午使
制蓋其以王子為官以按司為王子之子有分封
者並據今制而言非古也古時所稱按司即君長之
稱也據中山世系圖序初舜天子為眾所推為浦漆按
司後遂稱王舜天子非為王子之子者厥後凡王之
親戚尊次其王者為王子其為君長之稱亦猶古時
也階書以為歡斯曼已三品至七品稱謂牌古亦九
品稱謂筑登之亦皆古之遺言也里之子者里主之
轉語也袋中所錄古時有稱里主者而今猶有那霸
里主之職名明人以為察度漢稱謂王親即王子按
官即此察度方言所謂里也漢稱謂王親即王子按
司所謂王之下則王親尊而不與政者也法司官即
三司也察度官國稱那霸里主那霸港官國稱御物
城各有二員分治那霸四邑焉耳目官六員即法司
之屬猶漢六卿也以上所謂土官而為武職者也火

夫長史通事等官則專司朝貢不與政事皆為文職
明初所賜閩三十六姓之後讀書南雍暇即為通事
累陞長史大夫今僅存七姓而食祿者百餘人凡朝
貢事例單年則正貢二船以耳目官充正使正義大
夫充副使並正三品官也其屬有都通事寸府使官
舍使等職焉雙年則按貢一船接貢使才府使各一
員並從四品官也近例若有中國大喪則以正義大
夫充進香使新天子登極則以法司官正議大夫各
一員充慶賀使其國嗣封則以法司官紫金大夫各
一員充謝恩使其官皆是所稱于異邦也古時國無

姓氏只因所居之地而稱之中世以來王親豪族稱
之以其食邑其餘有職者亦因其所自出及所居之
地而稱曰某地某官其有姓氏者閩人之後耳雖然
其稱於國中猶國人也而今國人皆有漢名皆非古
也使琉球錄云國王姓尚氏至於陪臣則無姓氏但漢字按尚思紹之後世稱以尚姓自前世以來皆命氏而非古之所謂姓也
地猶因地命氏而非古之所謂姓也
不習漢字又謂自上古以來皆命氏也
之甚也
聞之甲子時人曰我王稱尚氏始於其世乎美嘗
尚姓不知所由也
親雲上已下雖曰無地亦有其姓是以所轄地名爲姓
謂漢姓也
甲子慶賀使與那城王子尚爲姓蓋其俗所

使金武王子勝連親方其所稱皆是某地某官也其
從官有曰官里親雲上者其所稱亦是某地某官而
其姓程名須則字電文即閩人之後文章之士也又
有曰王城親雲上者其名朝薰亦自稱曰漢姓向氏
漢名受祐又有曰砂邊親雲上者不知其姓名漢姓
會漢名曰曆並是國人而有漢姓漢名者曰

宮室第四

隋書曰王所舍其大一十六間彫刻禽獸民間門
戶必安獸頭骨角使琉球錄以謂殿宇朴素亦不
彫禽刻獸以爲奇大抵琉球俗朴而忠民貧而儉
富貴家僅有瓦屋二三間其餘則茅茨土階不勝
風雨飄搖之患人不善陶雖王屋亦無獸頭况民
間乎傳者訛矣陳氏蓋據其所見而言耳唯其以

獸頭為鳩吻類亦訛此土民間亦以牛馬頭骨掛之門戶云是避疫鬼古之遺俗也今時之制略述所聞

王府之制據山為城方各一里疊石為基繞以流水城有三門其西為國門蓋以天使館在西南港口之故也去國門西里許有牌房一座扁曰中山國門曰歡會府門曰漏刻殿門曰奉神每門有扁四周皆石壁府門外有小池泉自石龍口中噴出名曰瑞泉王府汲之供飲食取其潔也正殿巍然在山之巔殿閣二層南北八楹其位向西上以奉神中為朝堂下

與臣下坐立閣門俱五色珠為簾櫳正中三間略如金碧旁有側樓亦有平屋皆覆以瓦簾不遠地而階亦近除凡正殿畧倣漢制至如燕寢則皆如此間之制矣中山殿屋制詳見使琉球錄曰殿閣二層上為寢室曰正殿上層奉神之瓦所須治火後屋皆陶瓦極使之人曰黑漆按殿門扁曰奉神陳氏以閣上為寢室非也層閣之制蓋由來久矣中記云昔者大世王整世王左手有一國相急抽及斷其臂亦斷已臂以續之其像見有於求吉佛寺矣蓋其椽居以避蛇害也大世未詳世讚園有王庭階皆倣漢制其作大成疑此又使人曰正殿及門墻庭閣等所倣鋪地用板坐談置席制而有廣間書院之制為冊使而設也如其便殿則蓋古制也但其始自近時耳院王親以下品宮第等所裁有此制亦始自近時耳

宅衆庶屋舍亦皆如我制板屋茅茨階其有無皆繞以石垣其地多石故也

冠服第五

隋書曰琉球用鳥羽爲冠裝以珠貝飾以赤色形製不同織鬪鏤樹皮并雜色紵及雜毛以爲衣製裁不一綴毛垂螺爲飾蓋是古制即今不可得而考

王及王親以下品官章服制明世冊封錫以皮弁王圭麟袍犀帶貳二品秩王臣王相賽官錫以公服明既亡韃靼爲中國之主文武品官皆編髮胡服而中

山君臣猶依舊制其王受冊則及弁服正且冬至則烏紗折上巾披衣玉帶未襲封則用烏紗帽其臣三品以上皆幘頭公服其織成花樣文職用禽武職用獸革帶用金銀鈎釵其餘品官冠服皆如其俗古俗用色布一丈三尺纏其首王尚寧之世其臣名分雖國始製令冠常服用之王及王親用五色謂之五綵中次用紫色絹謂之紫光中次用黃絹又次用赤絹簪以金銀差等其衣則廣袖寬博製如道服腰束大帶庚寅使人所作圖皆如此甲午之冬美請觀其王子冠服制烏紗帽麟袍象笏金帶即是明世所錫其王也當今爲王子章服何也纏首之制見使琉球錄乃據其所見而言也今制標曲薄板被色絹於其

上分籜國或童子給髮簪用金花四垂者凡俗足者
作湯猶國草履入室則脫讀書號秀才者亦載中國方素巾足
不草履而鞋矣

禮刑第六

階書曰流求國無君臣上下之節拜伏之禮父子
同狀而寢大明一統志因而述焉陳氏使琉夏之
嚴而上下之節亦有等級之辨階書又曰獄無枷
鎖唯用繩縛決死刑以鑊錐大如筋長尺餘鎖項
而殺之使琉球錄曰國小刑嚴凡有竊物者即加
以剗刑之刑周書曰有盜竊輒加剗服剗刑之刑

即今詢其風俗禮樂刑政其制浸備矣

朝會之禮歲元旦長至凡大慶會則王親以下眾官

具冠服行拜跪禮四時俗節朔望亦皆冠服而朝尊

者則廷至殿內賜酒冠昏喪祭制世子冠禮蓋以烏

紗帽據世子未龔封王子按司之子冠于朝堂王賜

以其冠其餘有職者之子冠亦皆拜朝焉昏禮略與

此間俗同凡婦女子織紉組紃學以女事莫有職字

及飲酒者蓋防淫也如其親戚亦非賀正不見男子

夫死無子而不嫁民間貧賤之女亦罕有再醮者閩

人之後男不為國婿女不為王妃王妃則立國人有

職者之女為嬪御而有寵者為國喪一皆如大明集
禮之制世子居喪素衣黑帶嗣封之日冊使先祭前
王於寢廟世子憂服北面立禮畢從吉歲時祭亦如
禮制臣庶之家不必如制父母之喪不喫肉不飲酒
殯葬必謹如其七七日百暮年再暮亦如近世俗凡
有職者給暇五十日起復職至如公私慶賀燕會則
皆不與焉三年而後復初借書曰其死者氣將絕舉
屍以布帛纏之裹以葦草親土而殯之上不起墳子
為子者數月不食肉使琉球錄曰子為親喪數月不
食肉死者以中元前後日溪水浴其屍去腐肉收其
骸骨以布帛纏之衰以葦草觀土而殯上不起墳若
王及陪臣之家則以駮匣藏於山穴中仍以木板為
小牖戶歲時祭掃則啟鑰視之蓋恐木朽而骨露也

即今國人之言曰殯後三年藏尸石龕仍殯燕會備
植位牌蓋墓碑也其說畧與陳侃之言合
樂有國中中國二部國樂其唱曲則如我里謠其
器則三線子中國樂曰萬年春曰賀聖明曰喜昇平
曰樂清朝曰慶皇都曰永太平曰鳳凰吟曰飛龍引
曰龍池宴曰金門樂曰風雲會其明曲則有王者國
百花鬧為人臣為人子揚杳壽星苑上蓬萊等曲其
清曲則有天初曉頌皇清壽尊翁正月四季歌等曲
其器則嗩呐橫笛管鼓銅鑼三金三板二線三線四
線長線胡琴琵琶又有路樂其器則兩班銅鑼喇叭
銅角嗩呐鼓允刑曲有筇杖徒流大辟紋靴氣首等

法而不赦謀反惡逆不道不孝不義等罪若其輕罪
間有赦宥焉然而論之則其俗朴而忠其政簡而使
文之以禮樂非彼曩者之陋矣

文藝第七

琉球之學自中山王察度始厥後閩人從裔世傳
其業雖然洪永之間錫閩人於其國以比歲往來
朝貢故賜其善操舟者耳察度始使其子侄及陪
臣子弟入于大學如閩人子弟家本在內地亦因
肄業於其鄉先生飯即得為通事累陞長史大夫
者往往不絕於今其文彬彬可以觀者則察度之

化遠矣

國無文字俗相傳云昔有天人降而教人以文字其

體如古篆然出袋中所錄云昔有天人降而教人以

乃

日起宅天人又降召問曰汝知其凶何不告其凶對曰彼人
不問故不告即怒曰汝知其凶何不告其凶對曰彼人
而去唯存其半字猶曰汝知其凶何不告其凶對曰彼人
占卜書也美嘗觀于夫字其體如古篆古俗凡稱天
人不係此地之人也中世以來始傳此間文字明而
未知其為何國字

初其王察度請以子侄及陪臣子弟入于大學成化
間王尚真以官生蔡賓等五人肄業南雍學既成而
還即為通事累歷文職自是之後凡章表文移皆其
所掌焉國中所用文字一如此間之俗亦有善於歌

詞者周書曰陪臣子弟與凡民之秀則諸士大夫教
僧學之儲長史通事習華言入貢余不慧者宗俸
云經籍無五經有四書以杜律虞註爲經美觀其俗
詩詠歌亦有可以觀者凡學之學法王親已下品官
子第皆入國學有孔廟每春秋釋奠爲凡民子弟
則皆學於鄉校云俗間子弟皆自實語教始庭訓式
其所傳者而非其所長也云

風俗第八

天下之俗古今不同風化之變若陰陽晝夜於萬物然時既變矣物不能不變也雖然萬物之生天地猶不能齊安知天下之俗有始變者亦在乎其

既變之間也哉我觀流求之俗若其因革則隋唐之際既無考據况於上世之事乎今試聞其方言有可以解者焉有不可以解者焉蓋其可以解者此間之語最爲不少而如漢語亦有十之一二焉若其不可以解者則彼古之遺言而已矣若彼方俗亦然中世之俗與此間同近世之俗略與漢同若其非此亦非彼者則彼古之遺俗而已矣因錄舊聞以爲風俗志

男女皆露髻男則斷髮結髻於右國史所謂切髮草裳其由來既久矣右髻名曰隻首相傳云上世之人

皆載頭角昔者神崩厥在角後俗結髻以象乎古也
漢人之裔結髻於中皆挿以金銀簪纏首用色布犬
餘今之冠制始于此則賤猶露髻而已衣則寬博廣
袖腰束大帶足著草屨通國之禮握手膜拜若見異
邦之人則拜揖如儀凡卑幼路遇尊者結袖而掛肩
卸履而跪地俗謂公廨袖結蓋女則鬢髮如雲結為
高髻簪不加飾以墨跡手為種々花卉狀俗謂針刺
也上衣下裳其裳如裙而倍其帽摺紬而制之長掩
其足也上衣之外更用大衣廣袖者蒙之背上見人
則以手下之而蔽其面此間假髻出自琉球者最稱
上品蓋以其髮鬢黑而長故

也又蒙其背者此間婦費家大族之妻出入則戴笠
女所用蒙衣之制而已坐於馬上女僕三四從之婦女之俗幽閑貞淑不淫
不妬若其故娼頗更艷冶大抵其地土瘠民貧勤儉
質朴憂深思遠似有唐國之風者俗好聲樂皆弄三
絃相傳以為絃響能避蛇害農家挿秧獲禾乃携故
女盃彼南畝絃歌鼓舞先終畝者故女乃侑其觴其
疆域雖小風氣或殊山南之人不患痘疹山北之人
最為驍健國無醫藥民不夭札壽至期頤亦往往有
焉君臣民庶畏神尤甚蓋上世以降厥民分散洲嶼
各自有君長亦莫能相一唯有神降于其間為威為

福禁民為非是故舉俗敬神而神亦靈也其神稱謂
君真物神所憑之女稱謂君者三十三人皆酋長之
女其長稱謂神君其餘所在神巫百千為群神有
時而降鼓舞歌謠以樂其神一唱百和其声哀悅神
喜則眾皆相慶焉神怒則眾無不懼焉又有靈蛇國
人畏之如神婦人使琉球錄及國書云俗畏鬼神以
能使愚民懼王及世子陪臣莫不誓首下拜國以
凡謀不善神輒告王王就橋之惟其守護斯土是以
國王敬之而國人畏之也尸婦名女君首從動至三
五百人中以遊戲一唱百和音聲凄慘忽其來莫可
踪袋中所錄其畧相同而尤為詳悉凡其神異鬼怪
不可舉數而已甲午使神怪之事今則絕矣昔夏之世
百年以來民風大變神怪之事今則絕矣昔夏之世

遠方國物貢金九枚鑄鼎象物百物而為備使氏知
神蓋其國絕遠僻在南山海異氣所生鬼神奇
異之物亦何足怪焉且聞古之國無君臣上下
之節好相攻擊諸島各為部隊不相救其間則民
者共聚而食之若非有神威作福於其間則民之
無生亦既久矣方今文命祇承乃暨聲教而威福之
權既有所既久而食之若非有神威作福於其間則民
其所言亦如此耶亦不神耶柳不知使人自恥鬼俗
北島名猶有鬼與蓋謂其有甚者使遭蛇也怪之驚
有蛇蠟亦蠶人謂南中可畏之甚者使遭蛇也怪之驚
事也袋中以謂南中可畏之甚者使遭蛇也怪之驚
遭蛇害者又其王遭蛇害者又其王遭蛇害者又其王
蟄人者蛇類有七種美亦聞諸方言毒蛇乃使毒蛇
世冊封使遭蛇怪我俗亦傳之方言毒蛇乃使毒蛇
者五尺許不常入人家按毒又其國多有奉祀
蛇曰羽羽即此間之古言也

天朝宗社之神者焉

伊勢大神自尚金福始

八幡天神祠自尚奉久

始彼上之社洋之社尸キナ棄那之社普ラ天間之社未キ吉
之社並皆奉祀 熊野大神也其始不詳云蓋古
之時

天朝使臣所至乃命其祀以為國鎮也管神祠自尚
元之世久米島人林氏始又有天妃天巽等祠凡所
在大樹大石祭以為神不違故奉焉中人所錄者
又信浮圖之法其法唯有禪與密之二教耳圓覺天
殿二寺在都城南北殿宇壯麗並於王宮建善相國
報恩等皆禪寺也龍福王安國普門潮音等皆密
院也其餘寺院亦多見使琉球錄及

國

食貨第九

隋書曰厥田良沃先以火燒而引水灌之持一挿
以石為叉長尺餘濶數寸而鑿之土宜稻粱黍黍
麻豆赤豆胡豆黑豆等國史曰日本梗稻常豐一
藝而收即今詢其土俗皆不然也使琉球錄曰厥
田沙磧不肥饒是以五穀雖生而不見其繁碩也
至於賦歛則富古人井田之遺法但名義未詳備
王及臣民各分土以為祿食上下不交征有事則
暫取諸民而不常也寰宇記曰無他奇貨故商賈
不通周書曰時々資潤于隣島之富者蓋皆得之

矣但其使琉球錄以謂貿易惟用日本所鑄銅錢亦不然也是則古時其國所鑄如宋鸞眼錢者耳星槎勝覽曰俗好古書銅器使琉球錄亦以謂古畫銅器非其所好其所好者唯鍤器綿布焉蓋其地不產鍤土不宜綿故民間炊爨多用螺殼幻女織紘唯莫麻縷如欲以釜甑饗以鍤耕必易自王府而後用之否則犯禁而有罪陳氏所駁蓋據當時而言耳即今觀之畫皆不然也略記所聞以誌其食貨焉

諸島之地山谿崎嶇沃野鮮少厥曰沙磧瘠薄稼穡

甚艱氣候常煖年穀早熟而不見其繁碩也梗稻六月乃熟薩廣州人所謂琉球米其穀品最下品凡中山山北並多水田土宜稷稻山南地方多是陸田宜紋麥之屬即今其國稅額中山糧米七萬一千七百八十七石山北糧米三萬二千八百二十八石七斗山南糧米一萬九千九十六石八斗零其餘租課亦准此三山疆界地里志地無奇產商賈不通民貧而儉男女事耕織厥產多出蕉布島貢卉服國史草裳蓋謂之也炎方蒸溽不見霜雪隆冬之日時有雨霰而已故凡草卉之屬皆不凋枯取芭蕉生三年者辟纆成布最極織巧麻苧次之南島

三山糧米
合而十二
萬三千七
百十二石
五斗而已

所產閩書所謂南有大平出木芋即此久米島產絲
及綿閩書所謂西有古米出土綿亦此也大平山見
地里志方
物曰大平布曰久米綿即此通國貿易古時用海巴厥後國鑄銅
錢用之既久散亡少餘准今用穀布之屬若其與中
國交易銀貨則此間所產矣海巴具也銅錢使琉球
錄以謂薄小無文每十
折一每貫折百殆如宋季之鷲眼錢者但其以
爲日本所鑄即非美嘗問福建人以琉球交易其
例曰琉球交易止限船數不限銀額全貢用十餘萬
折貢用五六方以船小不堪多載也若用大船則福
州港淺不能進矣所賣唐貨細則絲綉凡百器則
緞等物粗則紙藥材等物不能詳錄焉
皆與此間同唯其甲冑兵刃不甚堅利弓材用壓剉
而弦之性急易折良者難得螺鈿諸器頗得拔法民

間炊爨多用螺殼蓋古俗也海產大螺貧家以代釜
甌云凡飲食饌造制精潔略與此間同使琉球錄以
謂不知烹調和制之味特不習北俗耳造釀之方酒
醪醋醬及乾醬之屬亦皆如我制使琉球錄又謂酒
以水漬米越宿婦人嚼以取汁曰米奇甚非也酒曰
米奇即此間方言也唯其露酒方始傳自外國色味
清而冽久之不壞能易醉人使琉球錄曰出自暹羅
亦非也造法不與暹羅亦非也酒同蒸米和麴各有
分劑不須下水封釀而成以甌蒸取其滴露如泡盛
之甕中密封七年而後用之首里所釀最稱上品其俗

名泡盛酒相傳云昔有外國人來曰國居南海廣霧
之中人必大死因授以避毒方即露酒也薩州人
之言曰天地生則人方物各有所宜本兵戊干中山
者三年一代之姓不嗜酒者亦在彼中善飲露酒乃
十數鐘而不醉北飯比至大島不堪數鐘及歸不能
下喉亦復如初凡布帛之屬時暑生薇酒以露酒色
即鮮明亦茶茗之品此間所產尤為珍惜茶室茶具
是式候湯立茶之法一皆倣我制函書以謂厥土獨
不宜茶茗即藝之亦不萌蓋其然也其國相傳云茶
使琉球錄以謂烹茶之法設古昂於凡上煎水將沸
用茶末一匙於鐘以湯沃之以竹刷淪之少頃奉飲
其味甚清是則此間之耳煎即藝之首里地冰霜潔
俗所謂臺子式而已
白不及南產亦是以供菓品國所制香品有香餅壽
帶香竹心香龍涎香官香等頗為奇絕

物產第十

階書曰俗無文字望月虧盈以紀時節候草榮枯
以為年歲蓋紀其上世之事也後之說者皆據而
言者非也其國相傳云昔有天人降而教文字其
書頗雖放失而干支古字於今猶存紀年候時豈
在草榮枯也哉至於明世以來奉其正朔每歲頒
曆一白本國亦造曆以授民時且其地辟在南荒
之中氣候多煖不見霜海颶時作草木凋枯而已
凡物產略與儋耳朱崖同其餘則不異此間也云
因作物產志

大明會典云琉球貢物馬力金銀酒海金銀粉匣瑪瑙象牙螺殼海巴摺乎子崩泥金崩生紅銅錫生熟夏布牛皮降香木香連香丁香檀香檀香黃熟香蘇木烏木胡椒琉黃磨力石則其國所產而已其餘則所與此間及諸國交易也穀則稻秫稷麥菽蔬則凡茄薑蒜葱韭之屬皆有焉亦有蕃薯可以代穀而食此間俗曰琉球者即此海菜可啖亦多菜則有菟蒚蕉子耳蔗石榴檳柿但無梅杏桃李之類近時有梅移自此間者唯著花而不結子草則山丹佛笑風蘭月桔名護菊粟菊盛花沢藤等品不少近藝烟草葉

細而長木則赤木其姓堅緻紫紅色而有白理蓋桐木之類本朝式所謂南島所出赤木即此俗曰カ黒木即會典所謂烏木也蘇鍊即使琉球錄所謂鳳尾蕉其野生則不如栽在園庭者榆俗曰カ木犀俗曰ハ阿檀福木曰テコ曰ヤラフ曰マ子階書所謂剛鏤樹使琉球錄以謂土產無其樹即今國人亦謂不詳階書曰剛鏤樹如檣而葉密條纖如禽鳥則綾鳩黑鷄鷄亦有異色者俗名ミフウツ蓋蝙蝠產于八重山者其形極大俗名ハ其餘有烏鴉麻雀野雉野鳧之屬但無鶴及鷓鴣而鴻雁不來秋月之候鷹

隼及小雀自南來者多畜獸則馬牛牛即水犬豕麋鹿
之屬皆無不有者而無虎豹犀亦產異色貓鼯則
蛇蝎之屬最多毒蛇凡七種蝎亦能螫人其有在于
壁間声噪如雀者春夏之交有赤卒自南而來亦多
鱗从則海出白魚亦名海馬馬首象身皮厚而青其
肉如鹿人常啖之馬鮫龍蝦之類亦皆有之棘鬣其
色不紅而味亦不佳鯨魚每出淡洲嶼之間而莫敢
捕者蛟龍時々自海中起而能致風雨俗謂之風符
也螺蛤之屬最多奇品貝子即會典所謂海巴螺殼
大者可以代金甌云

白石先生所著南島志一帖轉借

尋齋館御本早本天保十二辛丑年六月五日

書寫西榭御建立已來八十有餘年間有破壞

所往年天保或天保修復今年四月二十二日東榭建修

理南方建廣八尺余明後七日

中村萬喜與衛

薰菑錄卷之廿九

薰菑錄卷之三十

中村直衛輯

重刻甘藷記序

余友青敦書向承命種甘藷以試成熟而

詳記其種法及功用為一小冊刊布之蓋此

物其美無毒特為救荒之最要故欲令農夫

倣其法廣種以為用也實仁民之至矣哉此

冊獨行於關東而未遍畿邦其友人鈴木俊

民者深惜之乃自大坂通書青氏請重刻之

青氏稟官而許焉令余序之嘗聞壬子歲

西州大蝗赤地千里饑民枕藉道路官速

遣使賑恤之而不能遍濟獨種甘諸之邑居然
無事民免菜色其傷邑亦賴之活者甚衆其為
荒政第一之策者可以證焉然今大坂富甲天
下巨豪列屋一食費萬錢夫侈靡之俗一聞救
饑之說豈不驚異耶雖然居安不忘危聖人之
教也則此判或亦足為厭膏粱者一鑒云

延享乙丑仲冬日

東都呂實夫元丈撰

凡農民の助ふるるつふそののふまのまをすてんは志の
れもけり智をそよれは心ありて周書並農政全書
より唐の書物より法を考へ切替りけりやうり
肝おぼゆる

一味其く年もして毒なり虚をわらふひまをいぬ
成をこやうの骨をほくとも切山の芋と同一但中の
食をふるをすつて世をわて毒なりといふむがともや
はいもをむしりけり茶のこく切てぬるも食ふ時
ありて茶の人から百餘茶乃壽命となりといふ者
てとせしめてもや蓋も茶と茶のみ分るる茶

あして春とて

一はつまいも十五までぐらゆる切株あつたや一畝ふりて
数十石出ぬるや二色白く味何海一や三葉とある
る山の茅と切目一や四小茎汝よりと種はた二年
のくま一つとて其後の数百畝の古つてふや五
くま一葉地よけてゆふ根あるゆ凡ゆる扱はた六
少穀物のかよりふありききんのかさざりひをまぬら
や七茶子同あよとりも乃のとなふや八河は流るる
や九粉とて餅とてよ一や十生とても煮るとも今
や十一焼のお地はつと電利多く仰りやと一や十二

五なうして九月ふりねとめて茶葉のさつとて
けぐれとてけをむとてけとてねとてとよくおあ
や十三燈の害とてけと

一此のつらゆる傍より唐の岡とつふと始てつらる時
と地きさんなれと一年の食物とつらりや
やとらやせ地又の地とよくおある兩年ふりあてじ
日でりつとよとてとせとらとちとすよとらとつら
やとらとよとてとせとらとちとすよとらとつら
やとらとよとてとせとらとちとすよとらとつら
の地はあてと

一うん分法ハ十月おだろく一年生て暮のむんさうゆ
て一庚まさいハ牛馬のうんとおふゆぜやううに海さ
そん程のういといふとにすはに切てうおとあす斗
うけあついとをういふとくうるむろくうゆ
差むむらる何切てあよましくてもた祢とういふまらと
同あおのいもあめり入た子もすみまうよ切て皮め紋上
少しとおとけあ四あ尺斗小なるときぬ一四つ身て
切てあ一ニういおとのけつをとお乃よ一お一ういよはし
なておさるあよる一かきま小雨ゆりふうしてあてはし
差のひまほと一極ものびるそのうらういよえ肥し

暮のむんさううん分法ハ十月おだろく一年生て暮のむんさうゆ
て一庚まさいハ牛馬のうんとおふゆぜやううに海さ
そん程のういといふとにすはに切てうおとあす斗
うけあついとをういふとくうるむろくうゆ
差むむらる何切てあよましくてもた祢とういふまらと
同あおのいもあめり入た子もすみまうよ切て皮め紋上
少しとおとけあ四あ尺斗小なるときぬ一四つ身て
切てあ一ニういおとのけつをとお乃よ一お一ういよはし
なておさるあよる一かきま小雨ゆりふうしてあてはし
差のひまほと一極ものびるそのうらういよえ肥し
七月まていうしてとよ

一程の目お同いおとらう一極ものびるそのうらういよえ肥し
りうきあしういふとくうるむろくうゆ
ひむさくす一里いもとからふとあさい回一あさく
う一水園あていおたらく一入らういよ

一程の目お同いおとらう一極ものびるそのうらういよえ肥し
りうきあしういふとくうるむろくうゆ
ひむさくす一里いもとからふとあさい回一あさく
う一水園あていおたらく一入らういよ
一程とらうおさむらる九月中おと一水園あていおたらく
あくちあゆとらうかひてういふとくうるむろくうゆ
十月のやういよおとらうかひてういふとくうるむろくうゆ

冬中お小おけハ

考を乃後にかへる

一茎二三寸ほくろん根おさくおとくれお根よりて
いとゆるおとけらまは枝葉おさけりてゆゝに葉
根をさる付はききをつらばこれおほの折はくた
りてよ一切をさほるを牛にふへ馬よりふていよし
うら

一さむじ一草本とらひはらす時七は芋の根おホ一あま
いふじ一の書とけすききおほくは中よくおれを
いよじらる一世のはく年の始と出一おんおれおむ一
きてのち浮おあるもや一書人一年も作らした

叶まふものあてう一物の中乃お一也けり七世よ一いり
ゆら一史て天下は職人かふる

一唐の地の種よりけかく日本のおよりゆらゆら
何き流なり前漢書食貨志とる唐の書一
茶したたて一うふるを不易の上田とれ一茶やす
ゆせう少ぬ一易の中田とれ二茶やすゆさふと
再易下田とれ一あり日本地の二年もやゆさふ
ゆれくさ上田なり作り習く何よそも十をよ
ゆまはらんや

かゝのよ一書人の名一並らる物おれゆり習せ

この御筆もついでに誓旦たことあるの由り
しは中にあふく世に明の代は州縣小養濟
院は建て民の心をなすふ若とや一宮に
ひいふと云ふし御りこのはとと云ふく
ねまひんと云く御りあらふしと云ふと云

享保十九年十二月 刺草之臣青木敦書謹記

附録

一 貴乳^ちをかれは用てよ。あつ灰の中ふつと蒸^し煉^り細^く
くさい乳をとまふまひのつかつてはよ
一 炭火く後^しりてやうやくをれあららに右の
く用ひて瀉のやいふぬやそく用ひます
一 瀉海の者なるをまきりて難^く風^を吹^かすものあり
舎^を調^へていひて舎を合^はせらむ
一 ばいとを煮^きて何^れ塩^を入^れてのる塩^のをいひて
多く合^はせらむあり
一 此^の上^に皮^をとすくむと搦^りてはあふゆつちをとりて水

とく海へさるにけりて葛粉のこく製カタしたくふれは数年
扱すす作し本姑の粉とくなく色ありて中々製す
し味を豊きよし海へけり
一はいもは水と本より薄く切けりてきくこく製し数年
扱するありて風よけりてびのほろろやうふすし
一はいも煮てゆんちうやうめんのもく菓子に製するも
よくふせしとくこく製する海へけりてし

大坂新報所

鈴木俊氏重刊

文政五壬午年冬十月廿四日

中村直道写

蒟蒻録巻之三十一終

蒟蒻録巻之六終

